

第4回小児がんセンター 市民公開講座

「小児・AYA 世代がん患者の支援を考える

～小児がんと妊孕性、妊孕性温存について～」を開催しました。

平成31年3月2日(土) TKP ガーデンシティ横浜 6階ホール6Dにおいて、第4回小児がんセンター市民公開講座を開催しました。小児やAYA(思春期・若年成人)世代のがん患者には、その治療により、妊孕性(妊娠するための能力:妊娠するために必要な臓器・配偶子・生殖機能)に影響を受けるものがあります。そして、このことは小児にとっては将来子どもを持つことについて、またAYA世代の方にとっては、近い将来のイメージに関連していたり、また年齢によってはまさに今直面しているかもしれない大きな課題です。そして、これらの課題について、年齢や個人の状況により状況は異なりますが、患者視点にたった

生殖機能温存に関する情報提供や相談体制が必要であるとも言われています。そこで、今回、ご本人や家族、また周囲の支援者はじめ、一般の方にも少しでも理解をして頂けたらと思い、このテーマを取り上げました。

こども医療センターの山下総長から、デリケートな課題ではあるが、どのように支援できるかを考える機会としたいという挨拶の後、まず、女性の妊孕性について、聖マリアンナ医科大学 生殖医療センター副センター長である産婦人科医師の高江正道先生からご講演して頂きました。妊孕性

とは何か、がんの治療にとって女性の妊孕性にどのような影響がありうるのか、また女性における妊孕性温存治療の種類やその特徴が分かりやすく説明されました。そして、実際に聖マリアンナ医科大学で行われている「卵巣組織凍結」について具体的に説明もしていただきました。合わせて国内及び海外の現状についても報告を頂きました。講演の中で示していただいた、平成30年度から5か年にわたる神奈川県のがん対策推進計画

の中でも、「県が学会のガイドラインなどを鑑みながら、県がん診療連携協議会等と連携し、がんの診療連携拠点病院等において、小児・AYA世代のがん患者に対するがんの告知後、治療法を選択する前に、治療による妊娠・出産や性生活への影響について説明し、がん患者の希望や状態に応じ

神奈川県立こども医療センター第4回小児がんセンター市民公開講座

**「小児・AYA世代がん患者の支援を考える
～小児がんと妊孕性、妊孕性温存について～」**

神奈川県立こども医療センターは、厚生労働省から小児がん拠点病院として指定を受け、小児がんの知識の普及や情報発信を推進しています。今回は、思春期・若年成人(AYA)世代の小児がん患者さんの治療に関連した妊孕性について取り上げました。その専門家であるお二人の先生からお話を聞き、小児がんと妊孕性、妊孕性温存について知り、小児がん患者さんやご家族への支援を考えて行けたらと思います。

どなたでもご参加いただけます。参加無料/事前申込不要

【プログラム】
13:35～14:25 「小児がん治療と女性の妊孕性、妊孕性温存」
聖マリアンナ医科大学 生殖医療センター 副センター長 高江正道 先生
14:35～15:25 「小児・AYAがん男性患者の妊孕性」
獨協医科大学埼玉医療センター病院長/泌尿器科主任教授
リプロダクションセンター統括者 岡田弘 先生

日 時: 2019年3月2日(土)13:30～(13:00受付開始)
場 所: TKPガーデンシティ横浜 6階 ホール6D
横浜市神奈川区金港町3-1コンカード横浜 TEL:050-2018-2092
<http://www.tkpcy.net/access/>(裏面に地図あり)
主 催: 地方独立行政法人神奈川県立病院機構 神奈川県立こども医療センター
共 催: 横浜市医療局
後 援: 横浜市小児がん連携病院(横浜市立大学附属病院・済生会横浜市南都病院・昭和大学藤が丘病院)

平成31年3月2日 神奈川県立こども医療センター
第4回 小児がんセンター 市民公開講座 横浜

**小児がん治療と女性の妊孕性、
妊孕性温存**

聖マリアンナ医科大学 産婦人科学
高江 正道, 鈴木直

て適切に対応できるよう、妊孕性温存の専門医及び専門機関との連携体制の整備を検討します」とあります。小児や思春期の患者にとっては、その発達段階から理解や説明はどのように行うことが良いのか、などもはじめとした課題もありますが、行政や多病院が連携をとって、患者や家族にとって公平で確かな情報が提供され、支援が受けられる必要性が感じられました。

次に、獨協医科大学埼玉医療センター病院長で泌尿器科主任教授、リプロダクションセンター統括者の岡田弘先生から、男性の妊孕性について、そして妊孕性温存の方法についてご講演をいただきました。国内の調査で成人がん患者でも精子凍結保存症例は3割に至っていなかったこと、一方で政府主導での制度が設けられているフランスでは割合が高いことなど報告され、ネットワーク形成や情報提供の課題に関

して、簡便でアクセスしやすいシステムや情報づくりにも熱心に取り組まれているお話もありました。その他にも、事例を示していただき、その実際をわかりやすく共有してくださいました。女性と同様に、患者の年齢による意思決定の課題があること、それに対して妊孕性温存が考えられる患者や家族に関わるそれぞれの専門家、多職種で取り組んでいく必要性も示唆されました。

今回の参加者は医療者が主で、質問の際には、対象の患者がいた場合の対処などについて具体的な質問が聞かれました。一般の方の参加は少なかったのですが、県外からの医療関係者の参加もあり、アンケート結果では、とても分かりやすく詳細を知ることができてよかったこと、実際の現場で悩んでいることについて改めて考える機会となったことなど、内容についてよい評価の回答が得られていました。

当日ご講演いただいた先生方、ご参加いただいた皆様ありがとうございました。

なお、当日ご講演頂いた内容は、＜日経メディカル がんナビ＞サイトの下記の URL にも掲載されています。

* がん治療の影響から女性の妊娠力をまもる（高江正道先生）

<https://medical.nikkeibp.co.jp/leaf/all/cancernavi/report/201904/560591.html>

* 将来、父親になりたい人が治療前にすべきこと（岡田弘先生）

<https://medical.nikkeibp.co.jp/leaf/all/cancernavi/report/201904/560550.html?f>

神奈川県立こども医療センター第4回小児がんセンター市民公開講座
TKPガーデンシティ横浜 2019.3.2

小児・AYAがん男性患者（男児）の妊孕性

獨協医科大学埼玉医療センター
病院長・泌尿器科主任教授
リプロダクションセンター統括者
岡田弘

